



# 光の春から色の春へ

村松照男

気象衛星センター所長

一陽来復、冬至からわずかずつ伸びだした陽の足が、立春の声を聞くとともに日に日に勢いを増して春を感じさせる「光の春」となる。暦の上で冬と春を分ける二月三日の節分

が過ぎ、立春となれば寒が明けて余寒と呼ばれる春となり、気温が一年の底を抜けてやつと上昇に転じて春に向かうが「気温の春」はまだ先である。それでも「光の春」を追うように、雪に覆われた流れからは雪解け水ががすかに流れ出す音が響く「水の春」が続く。

雪が解けて平均気温八℃といわれる早春前線の北上で、列島は早春の冬枯れのモノトーンから、暖かな南風に誘われて最初にわき出すように咲く福寿草、マンサク、タンポポ、菜の花と続く黄色の花で覆われる「色の春」を迎える。黄色は、緑とともに太陽光の虹の七色の中で光のエネルギーが強い波長の一つであり、冬の長い眠りから覚めた植物に最初に降り注ぐ色としては最も似合っているといえる。冬枯れの木々からは新芽が萌え出し、

かすかな芽吹きが紫がかった灰色の薄いベールのように森を覆い、その中にコブシの白が点在する。そしてヤマザクラの白紅色に移り、やがて「桜色の春」が里に下りてくる。

桜の開花前線は、真冬の一月に沖縄の山から山麓に下りて台湾に近い八重山諸島に南下するヒガンザクラの開花で始まる。桜の開花には花芽を作るための春化作用、バーナリゼーションという寒冷暴露と平均気温が一〇℃以上という開花の条件が必要で、冬でも暖かな南国、沖縄では逆に気温の低下が必要である。その結果、寒波の南下につれて寒い山から里へ、北から南へ、サクラの開花前線が真冬の南下となるのである。

一方、本州のソメイヨシノは、気温一〇℃の春の訪れとともに開花となり、三月に上陸したあと時速一〇キロくらいで北上する。四月末から五月初めに津軽海峡を渡った後、北海道のエゾヤマザクラに引き継がれ、白に近い可憐なチシマザクラの開花で根室に向かう。

一月に南の島のヒガンザクラの開花が始まった桜前線の旅は、半年の旅を経て、北海道東端の終着駅にたどりつき終わる。移ろう季節の光の主役は、黄色の春の色から淡い桜色に移り、エゾヤマザクラの紅色が濃くなり、チシマザクラで薄くなる。葉桜を過ぎて薫風吹く初夏は、藤の花の紫から、新緑の緑の炎が一気に燃え上がる。

冬から春そして初夏へ向かう季節は、光が演出する気象の不思議な姿を見せてくれる。真冬のオホーツクの海には、日の出の太陽が四角形や六角形、時にはワイングラスの姿で浮かぶ。一面の流水野の冷たい海で下層の水平線近い空気が冷やされ、気温が逆転している層ができると、水平線に昇った朱色の丸い太陽を、その逆転層が上半分を鋭くカットし下半円だけ残す。その半円太陽が水平線を照らし、尾を引く姿がまさにワイングラスとなる。四角い太陽も、冷たい海に接する密度の濃い空気がレンズの役目をして、日の出の太



た光が目が届き、あたかも水平線の上に朱色の太陽が浮いて見えるからである。青は途中の空気で散乱されてしまい、見ている人に届かず、日没の最後の一瞬に緑色が残ってグリーンフラッシュとなる。冷たい海を西に望む、空気が澄んだ海岸線から見ることができ、見えたら幸運、写真に撮ることは神業に近いだろう。

一方、光は雲とともに多彩な春を演出してくれる。春一番、春二番、彼岸の嵐、花散らしの嵐と春の嵐の低気圧が通るが、日がさ月がさが天気悪化の兆しとなる。温暖前線上を毎秒数メートル

して目の前の雲海に自分の影法師とそれを取り囲むように小さな虹の環が写り、自分が動けばそれにつれて影と光環が不気味に動く。ドイツのプロッケン山でよく見られるので、その名がついた。若きゲーテがしばしば訪れ、彼の思想、色彩論にも強く影響を与えたといわれる。日本では古来、阿弥陀様の仏に後光の環を「御来迎」という言葉で当てあがめていた。飛行機に乗ると、眼下に広がる白い雲のじゅうたんの上に写る機影と、その回りに虹のような光環が取り巻き、機影とともに動いているのを見かけるが、これもプロッケン現象での光環である。

陽が縦にグリーンと引き延ばされてできる。海明けとなつて沖に去つた流水が水平線の浮き上がつて見える「幻氷」や、北アルプスの雪解け水が流れ込んだ富山湾の蜃気楼も、海で冷やされた空気の温度差のレンズによる屈折現象が演出している。春から初夏の風物詩である。

空気のレンズは、もう一つの「グリーンフラッシュ（緑閃光）」と呼ばれている緑の太陽も演出している。水平線に沈む朱色の太陽が三分の一ほど隠れたときに、ほんの一瞬、長くとも一秒、その上端が緑色に輝く。沈みつつある太陽が沈まずに見えているのは、空気のレンズで弓なりに曲げられた赤味がかった

速さでゆっくり上昇する空気が、数ミクロンサイズの水の微結晶からなる薄いベールのような巻層雲を作り、その中で屈折や反射によって虹の環のようなかさができる。また、十数ミクロンサイズの無数の水滴が浮かぶ高層雲を通して、ほんやりした月の外側に虹の環が出るが、色の順番は虹とは逆に内側が紫で外側が赤となり、環のサイズも小さい。無数の微水滴による回折現象が原因で、一般にはグロリー（光環）と呼ばれているもので、かさとはできる理屈が異なる。

この光の回折現象は、目の前に広がる雲海を舞台に「プロッケンの妖怪」という不思議な姿を見せてくれる。山の頂上で太陽を背に

「山眠る」冬が光の春のまぶしさと言の春に驚かされ、眠りから覚めて「淡谷にして笑うが如し」とざわめき、早春から初夏に続く光と色が織りなす気象の不思議な姿が季節の縮模様とともに次々と北上する。光の春から水の春、色の春、桜前線に春一番、彼岸の嵐、花散らしの嵐と過ぎて薫風と青風が吹けばもう初夏である。

（むらまつ てるお）一九四五年、静岡県生まれ。気象大学校卒。理学博士。専門は台風、天気予報学。気象大学校教授、札幌管区気象台技術部長、名古屋地方気象台長を経て、〇三年より現職。七〇年には南極観測越冬隊に参加。著書に『台風のエネルギー』、『大気とその運動』『気象と生活』（ともに共著）、『天気のかみ』（監修）など。